

ました。

地方では代々医家の家がまだ沢山ありますので、これからはそれを実行してみようと思っております。

私の家にも幕府時代、明治時代の医療器具が残っており、又処方箋(?)などもあります。ただどう整理するかが問題です。

保存について、公立の博物館に集めるのがいいと思いますが、一般的には無理です。そこで文献はコピーを大学関係の図書館に集められますが、器具はなかなか難しく、立派な蔵に保存されていけば、所在目録を作成して、時代と共に失われないようにチェックしていくのも一法ではないかと考えております。

3 ヨーロッパにおける概況と提言

石田 純 郎

一九九六年に考古堂から公刊した拙著『ヨーロッパ医科学史散歩』に、ヨーロッパの主要な医学史博物館、医史学研究施設および図書館について、具体的に記載した。

ドイツではほとんどすべての医科大学に医史学研究施設と図書室があり、常勤の研究者や秘書、事務職員が勤務し、医史学書、医学古書、歴史的医学雑誌、医史学雑誌が分類・保存されている。ドイツは親日的な国なので、管理者の特別な配慮で、こうした史料が予約なしに利用できることが多い。また大学・病院の各臨床科にも、関連医学史料、古医療器具、模型、解剖標本、病理標本が保存されていることがあり、日常的に廊下などのパブリック・スペースで展示されていたり、特設展が開かれたりすることがある。質の良い医史学博物館もインゴルシュタット、ハイデルベルクをはじめ、国内数か所にある。

フランスの医史学研究施設は、大学に属するものと、独立した研究施設の両者がある。ドイツと同様に、常勤研究者、事務職員がおり、図書室の併設が普通である。質の良い医史学博物館も、パリ、リヨンなどにある。また、フランスはカトリック国であり、この国の修道院は中世、前期近代期に病院棟として利用されることが多かった。そのため、一六一一八世紀を想定して復元した病院博物館が田舎に多いのがこの国の特徴である。ポーヌのオテル・デューはその代表である。

イギリス・ロンドンの科学博物館内のウエルカム医史学

博物館はヨーロッパ最大・最良の医学史博物館である。また別の場所にあるウエルカム医学史研究所には、多数の常勤研究者がおり、医学史図書室、医学史小展示コーナーがある。エディンバラの外科カレッジ博物館も中規模ながら展示の質がよい。イギリスには各地に個人の医科学者多くはかつての居宅、診療所、実験室)にちなんだ小博物館がある。

オランダはライデンのブルハーヴェ博物館とその図書室が充実しており、常勤の事務職員がいる。医学史研究施設は、ライデン大学(解剖学博物館、病理博物館(非公開)などもある)にあり、常勤の研究者が一名(ボイケルス教授)いる。ロッテルダム大学にも常勤研究者がいる。グロニンゲン大学とウトレヒト大学には大学博物館があり、常勤研究者がおり、医学史展示がある他、付設図書室もある。

この国の大図書館の総合図書目録は、日本からインターネットで接続が可能であるので、蘭古医書の検索は容易である。

バルト三国の一つ、ラトビアの首都リガの医学史料保存状況はきわめて良い。医学史博物館、薬局博物館、解剖学博物館がある他、医学史研究所には多数の常勤研究者がいる。

ハンガリー、スロバキア、ルーマニアなどの旧東欧諸国には、薬局博物館が多い。またハンガリーには古図書館が

各地に保存されている。索引が整備され、古医書が閲覧できる。

イタリアでは各大学ごとに小さな医学、解剖学博物館がある。常勤の研究者はいるが、予算措置がなされていないので、展示品の整備は不良で、埃をかぶっている。

以上、ヨーロッパのいくつかの国を取り上げたが、医学史料収集、保存、管理の状況は各国まちまちである。しかしながら、これらの業務は制度化されている国が多く、常勤研究者数は日本よりはるかに多い。また各国の医学史料収集、管理のための対GNP比の予算総額も日本よりはるかに多いと推定される。

4

石原 力

医学史料のうち、文献の収集、保存には、個人的レベルのもの、図書館その他の施設におけるものがある。ここでは前者について述べる。

個人で史料もしくはそのコピーを手許に所持することは、研究に当って好都合であり、むしろ不可欠といつてよいであろう。しかし、これには経済的、時間的、労力的、